

SPECIAL



東海道四〇〇年祭

祝祭劇

佐久夜

生誕80周年

「心の風景 山下 清展」

特別展 清の東海道五十三次

海沿いを往くことから「東海道」。
そう名づけられたこの道は、
これまでどれほど多くの物語を生み、
どれほど素晴らしい芸術を育て、
東へ西へとその芳しい薫りとどけたことだろう。
そして、今。
宿駅制度が定められてちょうど400年目を迎え、
ここにまた一つの物語が産み落とされようとしている。
ならば、旅は道連れ。
より多くの人々と共にこの節目に立ち合い、
震えるような感動を共有できれば幸せだ。

KIYOSHI YAMASHITA



東海道四〇〇年祭
シンボルイベント

祝 祭 劇

佐久夜

グランシップ 大ホール・海

◎主催／静岡東海道四〇〇年祭実行委員会
◎共催／静岡新聞社・SBS静岡放送、(財)静岡県文化財団
◎舞台制作／株式会社 おもだか ◎制作協力／松竹株式会社

8/24(金) 夜18:30開場 19:00開演
25(土) 昼13:30開場 14:00開演
夜17:30開場 18:00開演
26(日) 昼13:30開場 14:00開演

◎料金(消費税込み)
プラチナ席 ~~10,000円~~ (完売) SS席 ~~7,000円~~ (完売) S席…5,000円
A席…3,000円 B席…2,000円

◎店頭販売
チケットぴあカウンター／静岡県内サークルK全店／ファミリーマート全店

◎お問い合わせ
〈チケット予約に関するお問い合わせ〉
SBSチケットセンター TEL.054-363-5000
〈公演内容に関するお問い合わせ〉
東海道四〇〇年祭実行委員会 事務局 TEL.054-221-3632

関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が東海道の各宿に「伝馬の定」なる朱印状を発行し、宿駅を指定したのが一六〇一年。それからちょうど四〇〇年目にあたる今年、静岡県全域では現在、多彩なイベントが展開中である。その名も「東海道400年祭」。この旗印のもと、宿場ごとの祭りをはじめ、歴史探訪のウォーキングやシンポジウム、各種資料の展示、舞台芸

総合演出に市川猿之助氏。
スーパー歌舞伎の出演者・スタッフがおくる
富士の祭神「木花佐久夜毘売」の物語。

総合演出

市川 猿之助

歌舞伎俳優としてはもちろん、演出家、脚本家、プロデューサーなど何役もこなす。三代目猿之助。澤屋屋総帥。京都造形芸術大学副学長。(P6～7参照)

作

中沢 新一

ポスト構造主義を中心としたフランス現代思想とチベット密教の修業体験を融合した思想家と評されている。中央大学総合政策学部教授。

美術監督

朝倉 摂

舞台美術家。日本アカデミー賞など受賞歴多数。代表作に蜷川幸雄演出「にぎり江」、猿之助演出のスーパー歌舞伎「ヤマトケル」ほか。(P11～14参照)

音楽

加藤 和彦

舞台演劇や映画、クラシックなど幅広い分野で活躍、猿之助演出のスーパーオペラ「海光」、大ヒット作「新・三国志」等にも参加。

衣装

毛利 臣男

国内外でのオペラ、バレエ、スーパー歌舞伎、能、現代劇などの美術、衣装デザインを手掛け、斬新な空間作りでも高い評価を得ている。

中沢新一氏。嬉しいことに今回のための書き下ろしで、「静岡県の歴史から奥深いものを探りだし、未来に投げだしたい」と語ってくれた。

また、総合演出にはスーパー歌舞伎などダイナミックな演出で常に世を魅了する市川猿之助氏。今回は宙のりや舞台崩しなどは盛り込まれないというが、きつと歌舞伎の魅力もふんだんに、氏ならではの世界が展開されるに違いない。なにしろ出演者をはじめ舞台づくりに参加するスタッフ陣は、まさに猿之助チームといつていい顔ぶれなのだ。

まず、舞台を彩るのは、猿之助率いる二十世紀歌舞伎組から市川右近、市川笑也ら人気若手俳優に加え、

スーパー歌舞伎「三国志」にも出演し、超絶アクロバット群舞を披露した中国の京劇俳優22名。猿之助氏も「歌舞伎とはみずみずしいエネルギーの燃焼。京劇のもつみずみずしいエネルギーとを掛けあわせ、観る人が元気になる作品を創りたい」と語る。

美術監督には日本アカデミー賞や芸術祭賞など多くの受賞歴を誇る朝倉摂氏、衣装はさまざまなメディアで評価の高い毛利臣男氏、また、音楽監督は幅広い分野で活躍中の加藤和彦氏が務める。ちなみに音楽は加藤氏のオリジナル曲のほか、和太鼓や韓国の古式歌唱「パンソリ」が加わるという。さらに特筆すべきは一般公募による市民170人のコーラス。去る

6月6日には加藤氏立ち会いのものと、オーディションが行なわれ、7月末くらいよいよ合同練習がスタートする。

富士山は日本の象徴であり、心のふるさとでもある。それは宿駅が生まれる前も今も変わらない。そして、今、大いなる沸き立つエネルギーによって、あの美しい末広がりを湛える霊峰富士から、県民の心に響く壮大なドラマが生まれようとしている。

「駅」とはかつて馬を乗り換える所を意味し、次から次へと送り伝える、継いでいくという意をもつが、この新たな物語を次の時代へ送り伝えるという使命において、ふるさととはまさに一つの駅なのだという気がする。

あらすじ

天津神・ニニギノ尊と国津神・大山津見の娘、佐久夜姫の婚礼が始まる。天津神の勢力に国津神が屈したといえるこの縁組を嫌い、姫は逃げる。そこに瓜二つの姿の姫が現われるが、かつぎを取ると醜い悪女の相。それは岩長姫といい、佐久夜姫の姉。大山津見はこの姉もニニギノ尊に妻にと差し出すが、尊は美しい佐久夜姫のみを望んだため、岩長姫は天津神一族に呪いをかけ、永久の命を奪いとる。こうして永久の命を持つ国津神一族は地下の国、限りある命の天津神一族は地上に暮らすこととなる。時は過ぎ、ニニギノ尊も今は亡く、天津神の皇子の立太子の儀式の祝宴が開かれる。その席上、岩長姫のたたりで太子が突然昏睡に陥る。母太后は、富士のお山の地底に住む女神、佐久夜姫のもとに生と死を司る二つの玉があり、その玉を持つ者は永遠の命を得ると聞き、鶴正にその玉を取りに行くよう命じる。天津神の薬師・左近もまた太后の命で身分を偽り赴く。そして、二つの国の戦いは始まった…。

出演者



市川笑也



市川右近



市川笑三郎



市川猿弥



市川段治郎

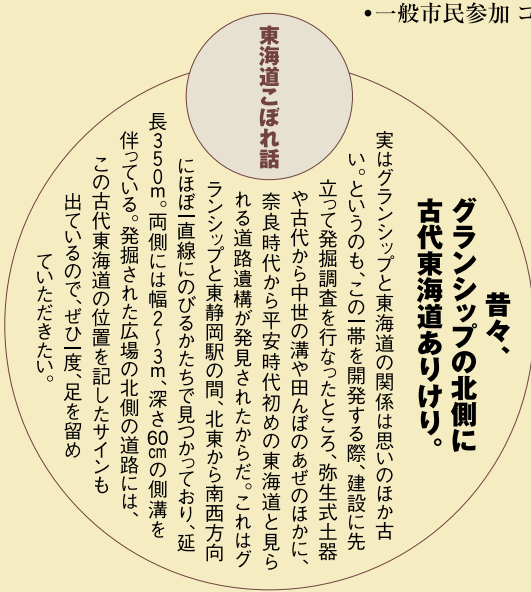


市川春猿



市川弘太郎

- 中国京劇俳優 22名
- 古式歌唱:朴 保
- 和太鼓:池田美由紀
- 一般市民参加 コーラス170名



生誕80周年
心の風景 山下 清展
特別展 清の東海道五十三次



9/8(土)→24(月・振休)
AM10:00~PM5:00(入場4:30まで)
グランシップ6階展示ギャラリー
一般 前売700円(当日800円)
中・高校生 前売500円(当日600円)
小学生 前売300円(当日400円)〈税込〉

主催／財団法人静岡県文化財団
共催／テレビ静岡 静岡リビング新聞社
後援／文化庁、静岡県、静岡県教育委員会、
静岡市教育委員会、清水市教育委員会、産経新聞社

チケット
発売中

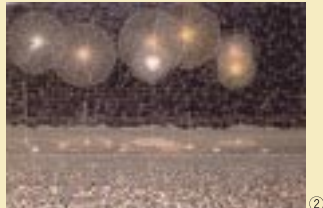
静かな視線でたどる
もう一つの旅。

放浪の天才画家、日本のゴッホ、裸の大将…と山下清に冠する言葉は数あれど、その作品ほど彼の人生を強烈に語るものはない。3歳で言語障害・知的障害となり、養護施設の手作業でちぎり絵の才を発揮し、その後放浪の旅を続けた彼が折々に見た感じたすべてがそこに綴られているからだ。さて、本企画ではヨーロッパ旅行での作品に加え、創作風景等の写真も紹介。また、東海道四〇〇年祭を記念して、ライフワーク『清の東海道五十三次』も特別展示される。折しも今年、生誕80年。実は本人は80歳位まで生きるつもりで本作にとりかかったという。が、スケッチ取材を終え、42枚目の『熱田神宮・名古屋』を描き終えたところで突然帰らぬ人になってしまった。貼り絵としては永遠の未完だが、死後、アトリエの押入れから残り13枚のスケッチが発見されたため、今回、版画全55枚を見ることができるといわけだ。享年49歳。最期の言葉は「今年の火花見物はどこへ行こうかな」。日本の風景、風物詩を愛した画家らしい人生の終幕であった。

①富士山(ペン画)1957年 ②長岡の花火(貼絵)1950年
③奈良二月堂(ペン画)1957年 ④パリのノートルダム寺院(水彩)1961年



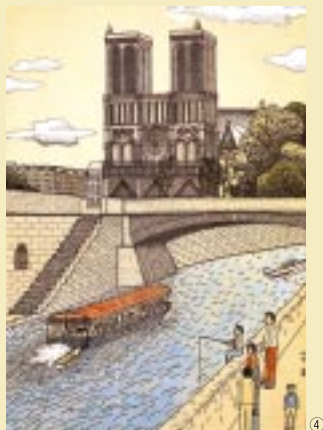
①



②



③



④

には、ぜひ自ら楽しんでくださいとエール。89年の横浜アリーナでのスーパードペラ『海光』では、アマチュア1500人の大合唱の舞台を演出し、大成功を収めた。

「プロじゃないのですから、苦しむ必要はない。まず楽しむこと、自分で感動することが大事ですね。アマチュアの皆さんと組む場合、難しい部分もありますが、舞台にある種のエネルギーが出ますから。そこが面白い。それも本人が意外なほどのエネルギーで、それで層感動してしまうんですね」

出演者もスタッフも共に切磋琢磨し、ふれあいながら創りあげていく。そこに芝居の醍醐味、歌舞伎の面白さがあるという。

「歌舞伎とはごった煮の面白さなんです。洗練じゃない。洗練はどちらかというとお能の領分ですね。それを見るほうも演るほうも誤解している。今の歌舞伎は戦後50年の歌舞伎で、それより以前350年はいわゆる江戸歌舞伎といって、常に新作をつくり、当時の現代劇、翻訳劇などを演つたりしてたわけですね。つまりスーパー歌

舞伎のコンセプトなんて明治にもあったんですよ。ところが今は現代劇は別の人たちが演り、外国の芝居もほとんど日本にやってくる時代ですから、歌舞伎はいきおい古典ばかりになって、形式化してしまっているんですね。それはそれで素晴らしい部分もあるけれど、私にしてみればもったいない。現代の新しい技術や素材を応用すると、凄いいものができるわけですから。歌舞伎は頭のお遊びではなく、五感で楽しむもの。そういうものを8月にもお見せできれば、と思います」

G

市川猿之助 Ennosuke Ichikawa

【いちかわえんのすけ】

’47年、三代目市川團子として初舞台。’63年、三代目猿之助襲名。同年に澤瀉屋総帥となる。以来、『義経千本桜』『伊達の十役』など早変わり、宙乗り等ケレンを取り入れた独自の舞台づくり＝猿之助歌舞伎で名を馳せる。さらに古典の新演出、復活通し狂言の再創造、スーパー歌舞伎の創演を三本柱に活動。オペラや新作物のプロデュース、演出も手掛ける。京都造形芸術大学副学長。’39年東京生まれ。



歌舞伎とはごった煮の面白さ。 ぜひ、五感で楽しんでください。

伎の面白さを理屈じゃなく、感覚的にわかっていただきたいと思つてるんです」

『佐久夜』は、奇しくも氏の三代目猿之助襲名のきっかけとなった作「黒塚」。“老女実ハ鬼女”と同様、人間に内在する崇高な精神と邪悪の心、善と悪の二面性がテーマ。登場する二人の姫、木花佐久夜毘売と岩長姫を美貌の女形市川笑也氏が一人二役で演じる。

「舞踊劇ですから見てきれいなものでなければいけません。そして、内容もできるだけ単純化したいと思つてます。見る人が芝居の間中、ふわっと心地よく過ごせて、しかも最後は良心の勝利で終わり、元氣になつてお帰りになる。そういう芝居にしたい。そのためには芝居の空気が流れがとても大事で、それをきちんとみるのが総合演出である私の務めですね」

「見ると、それは歌舞伎の衣装、化粧、髪をまとった古典の舞踊劇。しかし、そこに取込まれる音楽は邦楽ではなく、オーケストラに和太鼓、古式歌唱パンソリと彩りも豊か。そして、このパンソリこそ、今回の氏の試みの一つでもある。

「パンソリはテンポがあつて、哀愁とパンチがある。おそらく感情が高揚する場面で使われることになると思いますが、どんな感じになるのか、私としても楽しみです」

さらに一般参加による県民コーラス



朝倉 掬

無限の広がり。

「日本の劇場は間口が広いですから、
どうしたって歌舞伎の絵巻物のような感じになります。
ところが、私は役者が単に左右に動くよりも
縦に移動するほうに面白みを感じるんですね。
無限の広がり、というのでしょうか。
私の舞台装置に階段がよく登場するのは、
おそらくそういう意識が働いているのだと思います」

時間というファクター。

年におよそ20本もの作品を手掛けるという。アメリカだろうが、ヨーロッパだろうが、
身軽に飛び、朝倉掬たる魅力ある舞台空間
を創りあげていく。にもかかわらず、小柄で
華奢な身体にはまだ余りあるエネルギーが
潜んでいるかのようなでもある。しなやかで、
自由で、潔く、凛としてカッコイイ。氏が纏
う空気はまるでその手から生まれる作品そ
のままで。

——こうしたインタビューでは、必ずといって
いいほど、朝倉さんが以前日本画家として
活躍されたことに質問が及ぶのではないか

と思うのですが。

「それはもう判で押したように(笑) 実は日本画を描いていた頃も、踊りのセツトなどをやってはいたんです。二次元の世界から、舞台美術という三次元の世界、時間的な経過も含めれば四次元の世界ですが、仕事の場がそちらへ移っていったのは、自分としては自然なことだったと思いますよ。というのも、父が彫刻家で、彫刻のある空間の中で育ちましたから、立体というものに対する理解が子供の時からあったんですね。ただね、今の今だで、この道一筋と決めるわけじゃないんです。今日で舞台装置をやるというところもあるかもしれない。フレキシビリティをもつてね、いつでも自由でありたいんです」

—— 著書の中で、同じ空間芸術でも舞台装置がウィンドウ・ディスプレイと異なるのは、最初に戯曲というものがある。戯曲のないところからは舞台美術は生まれてこない、とおっしゃってますが、戯曲から舞台美術への立ち上げ方に、ご自身独特の作法みたいなものはありますか。

「それはなかなか言葉にできないですね。戯曲を読んで、これはリアルにやろうとか、抽象的にやろうとか、そういうことはありますが、それはとても感覚的なもので実際に手を動かしている過程でないと自分でも見えてこないんですね。強いていうならば、まず初めに文献でかなり細かく調べて、次にそれを忘れていくという作業でしょうか。けれど、舞台の上の空間にセツトができあがってもなお、そこに照明や役者が入って一つの時間が生まれるまでは未完成であるという、そういう仕事ですからね。ちなみに照明が入って

ない状態でも見られる舞台はいい舞台です。つまり道具がちんと作つてある。あとは照明の善し悪し、あるいは照明家の善し悪しということになります」

—— 海外からのオファーも数多くこなされている朝倉さんから、ご覧になって、日本と海外における舞台づくりの違いは何でしょう。

「それは舞台上上がってからの稽古の量が、日本の場合には圧倒的に少ないということですね。3日ぐらい前に道具を入れて、それで初日が開いてしまう。ところが向こうはブロードウェイですら10日はやっていますから。これは何が悪いかというと、日本のシステム、儲け主義がいけないんです。要するに稽古の時間を多くすればするほどお金がかかる。そこにお金を使いたくないということなんですよ。稽古だけじゃなくて、海外ではよくデスカッションもしますね。これがもう本当に納得するまでデスカッション。昨年、アメリカのセントルイス・オペラ・シアターで『源氏物語』をやりましたが、セツトも衣装もすべて向こうの人が作つたんです。事前に入念なやりとりがありますから、日本の古典の世界だろうが何だろうが見事に作りあげてしま

う。屏風も着物も髪もそれはもう驚くほど上手く作りますよ。しかも長袴まで履いているのに役者は決して転んだりしない。つまり時間のかけ方が違うんですね」

—— 『源氏物語』のように、美術だけでなく衣装も手掛けられることが多いと思いますが、「衣装の作り方も、日本と外国とは決定的に違うんですよ。向こうは全部白地から染める。で、その上に絵付けをしていく。それが日本ですと、その色を買ってきてパツ

と作ってしまうわけです。たとえばフランスでバレエを見ると、『白鳥の湖』などの『イルド・バレエ』(群舞の踊り手)のシーンでは前列のほうの衣装は白くて、奥に行くにしたがつて少しずつグレイになってゆく。そういう神経の細かさはやはり素晴らしい。これはもう、センスとお金のかけ方の違いですね。本来、舞台づくりというのは手づくりのものなんです。ところがだんだんオートマチックになつてしまつてるんですね」

—— 意識の違いがシステムの違いを生んだというのでしょうか。

「そうですね。なにしろ日本には国家で運営している芸大に演劇科がないんですから。

たとえば音楽科があるからオペラの歌手が輩出されるわけでしょ。その点、アメリカやヨーロッパは違います。とくにアメリカでは各大学でちゃんと劇場を持っていますから。先ほどのセントルイス・オペラ・シアターも大学の中の劇場で、ウェブスター・ユニバシティの中にあるんです。こじんまりとした劇場ですが、だげとやりばりそこで新しいエクスペリメントをやるといふ、そういう精神が素晴らしいと思いますね」

何もない、ただの箱。

—— 舞台美術という仕事にとつて、劇場は重要なファクターであるという気がしますが、朝倉さんにとつて魅力ある劇場とはどのようなものですか。

「壊れたような、要らなくなった倉庫のような劇場が一番いいですね。今、東京にベニサン・レトという劇場が川向こうにありますが、そこは元々染色の工場だったんですよ。そういうのが面白いですね。劇場にとつて装置とか舞台機構などは確かに重要ですが、スペース的に興行があり、なおかつ袖ステイジがあるというのは理想ですけど、そういうことに比べるとあまり問題じゃないような気がするんです。ですから、自分で劇場を作るとしたら、何もない、ただの箱、ここからが客席で、ここからが芝居で、こ



◆オペラ「The Tale of Genji(源氏物語)」2000年6月 セントルイス・オペラ劇場にて Ken Howard 2000

【あさくらせつ】

舞台美術家。70年、ロックフェラー財団の招聘でNYに渡り、舞台美術を研究。78年には富岡多恵子作『人形姉妹』を演出し、NYで公演。美術では『夜叉ヶ池』でテアトロ演劇賞、日本映画アカデミー賞、『悪霊島』で日本映画アカデミー賞優秀美術、『にぎり江』では芸術祭賞を受賞。89年には静岡護国神社境内で上演の静岡市政100周年事業『NINAGAWAマクベス』にも参加。その他、蜷川幸雄演出の『王女メデア』『近松心中物語』、スーパー歌舞伎『ヤマトタケル』『リュウオー』ほか、パリ・シヤトレ劇場『コックドール』、ミュンヘン国立歌劇場『影のない女』(共に猿之助演出)など、海外でも評価が高い。著書に『舞台空間のすべて』ほか。また、画家・劇場コンサルタントとしても活躍。

い勝手のいい空間とは思えませんが、ちょうど数年前にそこでビーター・ブルックの芝居を見たんです。演出家の力量と役者さんの力量とがオープンな空間にシンプルにのびのびと放たれて、とてもよかったですね。要は使い方なんでしょう。舞台装置というのは飾るだけが能じゃないですから」

――劇場コンサルタントとしてもご多忙のようですね。

「日本の劇場については、お客さんに見える部分はともかく、舞台裏の奥行が狭いということがあります。けれど、一番いけないのは間口が広いということです。日本の歌舞伎から発達しているせいでしょか、たとえば十間なり、二十間なりの幅に対しての高さがない。ですから、どうしたって歌舞伎の絵巻物のような感じになる。私なんか、その広さをもてあましてしまうんです。その点、外国では間口が日本の半分。その代わりタッパはずっと高い。そうでないと西洋の戯曲はできないということもありますが、私自身、役者が単に左右に動くだけではどうも面白くないぞ、というのがあるんですね。どちらかという縦に移動するほうに面白みを感じる。無限の広がり、この中でしょいか。プロセシウムアーチ（額縁）からはみ出したいと。私の舞台装置に階段がよく登場するのは、おそらくそういう意識が働いているのだと思います」

――歌舞伎、オペラ、ストレートプレイとさまざまなジャンルを手掛けられておられますが、ご自身では何が一番好きですか。

「それはもうストレートプレイですね。この間、静岡でやった『サド侯爵夫人』（SPAC／静



岡芸術劇場、ああいうのは面白いですね。

本もしっかりしてると、劇場自体もいい。そういういえば静岡には円形劇場（有度山芸術公園の椿田堂）もありますね。あれもいいじゃないですか。舞台装置も飾らずに、そのままお使いになればいいと思いますよ。もちろん脚本に制限はありますが、チーフホフなど室内劇がいいんじゃないですか。鈴木忠志さんは世界中が病院だというコンセプトをもとに芝居づくりされてますが、同じ作品でも前回と今回とは動きや速さが少し違ったりする。つまり一回一回きちんと考えてつくってるといことです。その上、フェスティバルなどを通して若い演出家にとんだん道を拓いてらっしゃる。あれも素晴らしい。一緒に仕事をしても頭のやわらかさを感じる

人ですね」

――この夏はグランシップで上演される『佐久夜』に参加されるとお聞きしました。総合演出の市川猿之助さんとは、『コックドール』以来、数々の作品で一緒に作られてますが、猿之助さんの芝居の魅力はどんなところにあるとお考えですか。

「あの方は歌舞伎を芯にやられていますから、歌舞伎から絶対に離れない、テクニクや要素はすべて歌舞伎を用いて、余計なこととはならない、というところがやはり素晴らしいと思いますね。歌舞伎でまじめあげるノウハウをしっかり持ってるらしい。今度の作品『佐久夜』も、歌舞伎の所作や踊りを主体に考えているとおっしゃってますし、猿之助さんらしい芝居になるのではないですか」

チケット発売中

東海道四〇〇年祭 シンボルイベント 祝祭劇「佐久夜」
(美術監督／朝倉 摂)

8月24日(金) PM7:00開演

8月25日(土) PM2:00開演 PM6:00開演

8月26日(日) PM2:00開演

会場: グランシップ大ホール・海

プラチナ席 10,000円 完売 SS席 7,800円 完売 S席 5,000円

A席 3,000円 B席 2,000円

※関連記事P3～7もご覧ください。